

札幌市立南が丘中学校の取組

1 研究のねらい

本校の総合的な学習の時間は、共通テーマ「知る（自己・他者・地域）」「使う（言葉・表現）」「発信する（コミュニケーション・提言）」を軸に、1年「環境を学ぶ」2年「働くということを学ぶ」3年「国際理解」というテーマで実施している。

3年生のテーマ「国際理解」では、「国際社会に生きる日本人として、日本と諸外国の伝統文化・産業・歴史について理解し、国際理解の意識を高める」を目標に取り組んできた。平成 24 年度からは、在札幌総領事館の領事、大学講師、地域在住の外国人を講師に、生徒との交流会を実施してきた。平成 29 年度からは、札幌国際プラザと北海道庁国際局国際課の交流員を学校にお招きし、課題探究的な学習で学んだことをもとに、生徒との交流会を実施している。

2 取組内容

課題：設定した課題の解決のために、日本と外国について調べたことを、どのようにまとめ、国際交流会で伝えたらよいだろうか。

(1) 事前の取組

① 課題の設定

国際理解について各学級でオリエンテーションを行い、事前アンケートで、アメリカ・中国・ドイツ・フランス・ロシアの中から興味のある国を選択させた。希望した国ごとに集まり、他学級の生徒同士で構成された 3～5 名の班で話し合い、その国について興味をもって調べてみたいと思う課題を設定した。

<例> 「なぜ、ロシアは鉱業と工業が盛んなのか？」

「ドイツ帝国はどのようにできたのか？」

「なぜ、フランスの食文化が発達したのか？」

「なぜアメリカではアメフトとラグビーのような似たスポーツがあるのか？」

「なぜ、中国はスポーツが強いのか？」

② 情報の収集

学校図書館・コンピュータ室・教室の PC を活用し情報を収集した。自宅の PC や地域の図書館で調べた情報を持参した生徒もいた。また、調べていく中で生じた疑問や質問をまとめ、事前に交流員にファックスで送付した。

③ 情報の整理分析と課題解決のための仮説の設定

生徒が日本と外国を比較し情報を収集、情報の関係性を分析・整理、設定した課題を解決するために仮説を立てることで、課題探究的な学習の充実を図ることができた。

<例> 「日本とアメリカで、同じイベントでも内容が違うのはなぜだろう？」

仮説①⇒国を越えてイベント（ハロウィン等）が伝わる時に誤りが生じたから。

仮説②⇒それぞれの国にあったスタイルに変化させていったから。

④表現・発信

各班で発表内容について実物投影機を用いて8分程度のレポートにまとめた。リハーサルでは、説明する声の大きさや、スピードに気を付け、聞いている人に伝わる発表の仕方を練習した。

(2) 当日の取組

当日は2時間扱いで実施した。はじめに交流員からの自己紹介、次に各班からのレポートの発表を行った。生徒は聞いている人に興味をもってもらえるようクイズや豆知識を取り入れて、見やすくわかりやすい発表になるように工夫していた。最後には仮説についての検証、結論、感想を入れ、課題探究的な学習の充実を図ることができた。

次に、交流員からスライドによるプレゼンテーションの発表があった。自分の国の地理、文化、歴史、伝統、日本との違い等について、事前に送付した質問に対して答える形で説明をした。交流員は日本語が堪能で、小・中学生対象の授業に慣れているため、時にはユーモアを交えながら、大変わかりやすく楽しいお話を聞くことができた。



3 成果と課題

(1) 成果

この課題探究的な学習を通して、「国際社会に生きる日本人として、日本と諸外国の伝統文化・産業・歴史について理解し、国際理解の意識を高める」という目標はおおむね達成することができた。生徒の感想の一部は以下のとおりである。「今回アメリカと日本のイベントの違いについて調べてみて、同じイベントでも国によって目的ややり方が違うことがわかりました。これからもハロウィンやクリスマスなどいろいろなイベントを楽しむことができますが、そのイベントの背景や、国による違いにも目を向けていくことが大切だということがわかりました。」「私たちはフランスと日本の生活の仕方の違いについて調べました。フランスでは3つの気候の異なる地域ごとに家の作り方が違います。また2020年から世界で初めてプラスチック製の使い捨て食器の使用を禁止する法律が施行され、2025年までにゴミの埋め立てを半減することを目標に取り組んでいます。一軒家にこだわらずアパートマンに住む人が多いのも、日本と違うところです。フランスは他人にとらわれず、自分らしさを大切に生活する国だということがわかりました。前よりもフランスという国に興味をもつことができました。」



(2) 課題

国際交流会の翌週には、日本国際飢餓対策機構の職員を講師に招き講演会を実施した。毎年国際交流会で取り上げている国は全て先進国であったが、開発途上国に目を向けると、貧困や飢餓に苦しんでいる子どもがたくさんいるという、厳しい現実を知ることができた。今後も様々な観点から、国際理解の取組の充実を図る必要がある。